

珈琲のへちま亭マスターだった山城さんのファーストネームを忘れてしまい、生前貰った大事な手紙の入っている箱を開けたがない。あれ？仕方がないので今日その辺を探すと起き出したら、彩都西小学校の中村亀雄校長先生からのメールが入っていた。幸多朗の学校の校長だ。悪い予感が当たった。しばらく涙が止まらない。どんなに痛くても痛みだけでは絶対に泣かないのに。

今年度で定年により退職するというご挨拶だった。さる十九日から千里中央と彩都を結ぶ大阪モノレールが開通し、その前日に朝日新聞に特集が載った。中村校長のこやかな写真もあつて「ああ、web日記で楽しませて貰っているイメージ通りの先生だったなあ」と嬉しくなったが、ふと年齢を見ると六十歳とあり、ギョ、ひよつとして定年。でもweb日記では全く感じられないし、とひやひやつつ、毎夜の「彩都西小サイト」を開いてたのだ。終業式は二十三日だったし、二十四日にこーちゃんに電話した時も両親からそんな話はなく、胸をなで下ろしたところだったのに。今年一月に行われた金山正吾さんらC.V.Vの一年生課外授業にわたしが少し絡んだことへのお礼や、web日記愛読へのお礼も書かれていた。恐縮を通り越して感激やら寂しさやらが押し寄せた。山城さんで参っている上にある。

これほど児童の側に寄り添える校長先生も滅多にないのではと思う。自然の変化をこれほど敏感に察しめる校長先生も滅多に居ないはずだ。新設校を三年間苦勞されて活氣溢れる、かつ礼儀正しい学校に育て上げられ、さあこれからと思っていたのに。後任の校長がどんな方が知らないが、どうか良き伝統を守りさらに広い燎原の火のように良さを伸ばしていつて欲しい。中村先生の上にも神の加護を祈りたい。

山城さんの巻物手紙も結局探す気にならず、きのう箱の中にあつた「家族庵」の守屋篤太郎さんと、やはり上司だった故人の元報道本部長(編集局長)草地数磨さんの手紙を読み直す。守屋さんは、わたしのことを尊女と書いて下さっている。少し健康を害していたことへの労わりと共に、信州の製粉所で見付けた青年を鍛えたい、もつとおいしいかやくご飯に挑戦してみたいなど書かれている。なにしろいい蕎麦粉を求めて全国行脚をする人。蕎麦を打つ石うすも盛り付ける器も、一人前に育てようと支援している若者たちの作品だった。毎朝の蕎麦粉は、前夜の天気図から気圧を算定して水加減を決める徹底した職人だった。

守屋さんが朝日放送の技術局長(取締役)で、甲子園球場から初の高校野球TV中継をした責任者だったことを知る人は少なかった。ハイリッチな苦楽園にある自宅に、八木一夫ら著名な陶芸家や画家の作品がずらりと並ぶことを知る人はさらに少なかった。何故蕎麦処に？の質問に、さらりと「早稲田の下宿先が寺で、そこのお坊さんの打つ蕎麦の味を再現したい、ずつと思ってきましたんや」と答えた。男のロマンであるが、大阪の有名蕎麦店「家族亭」で一から修業しての開店は、簡単なわけではない。腰をかがめての蕎麦打ちで、腰痛は持病となり、そんな「家族庵」に行くことは、わたしにも自分に初心に帰ることを命じる行為となっていた。